北涯の〝大東亜共栄圏〟終末像

貴司山治『蒙古日記』解題

伊藤　純

一　『蒙古日記』の成立経過と特徴

貴司山治は、太平洋戦争の末期昭和十八年（一九四三年）九月から十一月にかけて約三ヶ月、内蒙古を中心に、北京、山西省大同、太原、旧満州のハルビン、新京（現・長春）を旅行した。そして〝約百万字〟におよぶ旅行記録『蒙古日記』を書き遺した。[1]

この『蒙古日記』は、既にＤＶＤ版で刊行されている『貴司山治全日記』[2]に画像データとしては含まれているが、内容的には、日々出来事を書き記していくいわゆる〝日記〟とはやや異なり、帰国後に、旅行中のノートや資料なども参照しながら、記憶に基づいて、速記者に口述したものである。その完成には、帰国直後から半年以上かかっており、若干の書き込み、推敲も加えられている。そういう意味では〝日記〟とはやや異なる独立した「旅行記」、一つの作品といえる形になっている。

以上のような成立事情から、この『蒙古日記』の特徴を要約すれば――

① さい果ての〝大東亜共栄圏〟に生きるさまざまな人びと（日本軍人、官吏、蒙古浪人、さらには蒙古の活仏[3]、王[4]、役人、商人など）の生きざまを人間くさく描写記録する作家的記述。

② 当時の内蒙古の政治・経済・社会の実状を、軍司令官や公使、蒙古自治邦のいろいろなレベルの役人、特務機関長や嘱託下僚、僻地医療に挺身する医師など、多くの人びとへの取材と、統計資料などで記録したジャーナリスティックな、調査的な記述、記録。

③ プロレタリア文学から転向して新たに依拠しようとした〝東亜協同体〟幻想からも裏切られつつある現実に直面して、その協同体の北涯をさまようことで、もう一度作家的スタンスを考え直そうとする、煩悶と自省の記述。

図1：貴司山治全日記（左手前の平積みの6冊が『蒙古日記』全5冊と妻孝子による『留守日記』1冊）

という三つの要素が入り交じって縷々展開されている。

これらを通して、具体的には例えば、三十二歳の日本人青年が唯一人の権力者として君臨する草原の果てのシャングリラ・西ウジムチンの滞在記、徳王を見出し内蒙自治運動を事実上立ち上げた人である生粋の蒙古浪人笹目雄恒[5]の一夜語り、草原の奥に幽閉軟禁されているある蒙古王の訪問記（「軍秘」と注意書きされている）、更には「秘密」「厳秘」などと添え書きされたシリンゴール盟の人口推移や貝子廟中学生徒の梅毒感染率統計、献身的な医療者青山医師が語った草原の医療の実態など、いずれもいわゆる〝正史〟ではうかがいしれない昭和十八年という時点での内蒙古の生きた姿、生きたエピソードが記述されている。

二　内蒙古旅行に至る経緯

どのような経緯で貴司は内蒙古に行ったのか。昭和十八年という戦局の押し詰まった時期に、対ソビエトの最前線である内蒙古に、個人的に旅行などできるはずはない。

昭和十七年九月八日の貴司の日記には「今の自分の生活を救ふものは戦争だけだ。報道班員採用の命令がこないものかどうか。」と戦地への徴用を待望する文言が記されている。

ただ、その真意はくみ取りにくい面もある。この時期貴司は、何人もの速記者を雇って大衆小説を書きまくる（おそらく月産数百枚）という状況で、大衆小説家としてはむしろプロレタリア文学時代よりはるかに恵まれた状態にあった。にもかかわらずこの煩悶は何なのだろう。

第一には、日記のそこここに書き込まれている、極めてプライベイトなことであるが、昭和十六年に妻恵津（貴司悦子）を結核で失ったという〝悲劇〟である。恵津は、若い頃から結核を病んでおり、なかば病床にいるような生活だったから、主婦らしいことも母親らしいことも世間並みの半分くらいしかできなかった。しかし、日記の文言によれば、文学的・思想的なものも含めて、生きることの重要な支柱となっていたということが、くりかえし記述される。それは去ったものへの美化もあるかも知れぬが、ともかく、その支柱を失ったことが作家としての〝時代との戦い〟に大きな喪失感をもたらしていることがくりかえし愁訴される。

そして第二に、日記中にもう一つ繰り返されている特徴的な文言がある。例えば昭和十六年十二月三十一日の年末総括的な記載――

『フェンスレス』オンライン版 第2号（2014/06/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

来年はひきつゞきやはり通俗文学に終始する。芸術文学の作品をつくるのはついに私には四十五才（＊数えで再来年の歳――伊藤注・以下同じ）以後となつてしまつた。

〝芸術文学〟に取り組むことにより予想される収入減に対処するために、当面は通俗的な仕事に取り組まざるを得ない、という目算である。逆にいえば可及的速やかに通俗を脱して〝芸術文学〟に取り組まなければ作家としての己を失う、という危機感である。

通俗的な仕事というのが何で、芸術的な仕事が何なのかは議論を要するところだが、ともかく、月数百枚量産中の大衆作家が、その最中にも純文学強迫観念に囚われ続けているという現実が認められる。

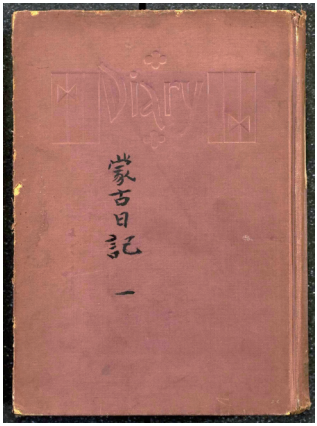


図 2：『蒙古日記』第 1 冊目表紙

貴司に関していえば、少なくともプロレタリア文学の世界にいた時には、そのような強迫観念はそれほど露わではない。むしろ、大衆の心の中に直接に飛び込んでいける通俗作家としての技術と作風をもっていることで、それを持たず理解もできない正統左翼作家を〝見下す〟境地を保っていたように見える。

しかし、プロレタリア文学が崩壊し、その思想的支柱が失われると、この強迫観念は復活する。貴司は自分が編集発行した雑誌『文学案内』で、志賀直哉や徳田秋声への対談を企画し、私小説的純文学の秘密に迫ろうとしたりもする。しかし戦争に向かいつつある時代は、そのような志向よりは「近代の超克」というような集団主義幻想がいやおうない選択肢として突き付けられてくる。しかも、大東亜の盟主として西欧を駆逐し、退廃と汚濁にまみれた西欧的資本主義近代を超克した新たなアジア共同体を構築する、というスローガンの下に戦争は始まってしまっているのだ。既成事実化した事態の前に、無理にでもこの共同体幻想に自己を同化させるしかない。純文学強迫をこの東亜協同体幻想に無理にでも置き換えるほかない。

かくて「今の自分の生活を救ふものは戦争だけだ。」という結論が書き記される。

しかし、一旦はほぼ決まりかけていたかに見えた南方に行きたいという従軍希望は昭和十七年九月、海軍省によって拒否される。

その後、〝華やかな〟南方戦線ではなく、あまり注目されない内蒙古への派遣が浮上してくるが、その端緒や経緯は日記によってもあまり明らかではない。昭和十七年十二月五日の「池田M[6]両君に両国であひ、はせ川で食事。蒙古行の話。」というのが、内蒙古旅行関連の最初の記載である。池田はおそらく当時蒙古自治邦駐日代表部の職員で徳王[7]の秘書などもつとめたことのある池田武夫、Mは、

内蒙古旅行の前半貴司に同行し先達を務めた自称画家である。貴司はその後も何度かMとあい、旅行直前の昭和十八年夏には軽井沢の別荘にM夫婦を招待している。

内蒙古旅行中の貴司の身分は「蒙古自治邦嘱託」となっており、旅行先の特務機関や関係の役所には駐日代表部から公的な旅程の連絡が廻っている。しかし、『蒙古日記』の記事から類推すると、蒙古自治邦からの旅費の援助を拒否したり、Mが密かに関係先から金を受けとっているのではないか、ということを厳しく詮議したりしており、旅費は自分持だったようである。おそらく、蒙古当局や日本の役所に対して提灯記事を書く様な負い目をできるだけ作りたくない、という配慮のように思える。内閣情報局や軍の特派員派遣というのとは少し異なるようである。

内蒙古旅行を前にした昭和十七～十八年、この時期は戦争の状況が大きく転回していく時代でもあった。その典型的なメルクマールに、昭和十七年六月五～七日に太平洋の真ん中で戦われたミッドウエー海戦がある。この海戦の敗北によって日本は早期講和の機会を失い、国力差による必然的敗北のコースに否応なく入っていく。この重大な転機が、まだ日本中が勝った勝ったと浮き立っていた開戦後たった七ヶ月の出来事であったということは銘記すべきことだが、昭和十七年九月頃には貴司は「読売新聞第一線の会」（同紙寄稿家の会）での平出海軍大佐のオフレコ談でその真相を聞き、東亜協同体幻想が正に幻想と化したことを認知したはずである。[8]

昭和十八年六月四日の日記には――

……仕事から仕事へ、こゝが私の逃げ場かも知れない。毎日の戦況、世界をあげての大戦の渦中にあるのだといふことが瞬時として忘れられえたことはない。この怖るべき時代をいかに生くべきか？　……時局に合奏する小説を書き思想をしやべる人間なんか、単なるジヤーナリストにすぎない。

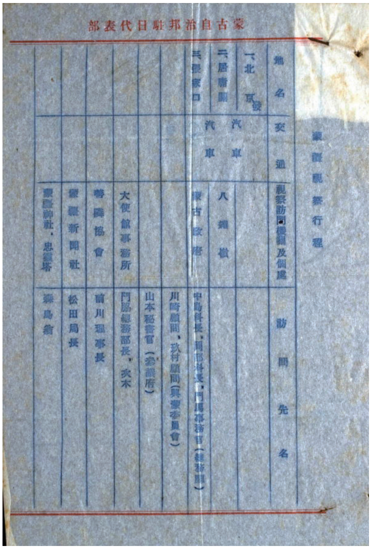
私は心が今の現実の負担にともすればたえなくなり、崩れそうになるごとに、戦後の世界、戦後の日本の生活といふものを瞼の中に描く、……しかし、日本が破滅するか、打ち克つかがわからなければ、明日のこともわからない、……勝つにきまつてゐるなどといふ安易な考へは、今流行かも知れないが、自分にはひゞかない。（……は中略を示す。以下同じ）

と記し、また――

ドイツは、二年目の今になつて、はつきりと失敗の泥濘中に立つたやうだ。

……日本の闘争が民族の生存権のための闘争であるかぎり、敗れないといふことは、日本人が二十世紀の歴史にのこす偉大な文化的教訓であらねばならない。（六月二十日）

など、錯雑した想いが錯雑した言葉となって記されている。この


蒙古自治邦駐日代表部

蒙疆視察行程

地名	交通	視察訪問機關及個處	訪問先名
一、北京（發）			
二、居庸關	汽車	八達嶺	
三、張家口	汽車	蒙古政府	中島科長、岡部科長、門馬事務官（總務廳）
			川崎顧問、玖村顧問（興蒙委員會）
			山本秘書官（參議府）
		大使館事務所	門脇總務部長、炎木
		善隣協會	前川理事長
		蒙疆新聞社	松田局長
		蒙疆神社・忠靈塔	森島衛

図３：「蒙古自治邦駐日代表部」発行の「蒙疆視察行程」。行き先、交通手段、訪問施設、応対者が詳細に記載されている。

ような、いくら考えても依拠すべき筋道が最早見えてこない戦争の日々の現実を置いて、貴司は内蒙古に旅立つ。それは日本列島の現実からの逃避であるようにも見える。

三　主な旅程①　東京→北京→張家口

昭和十八年九月十五日、貴司は絣の単衣、下駄、折り鞄という軽装で、誰の見送りもなく東京駅を出発する。現今の感覚では、単衣に下駄履きというのは数ヶ月の外国旅行に行く者としてはやや違和感があるが、当時は、残暑の季節の男性の服装としては普通のものだったのだろう。

九月十六日、下関で関釜連絡船に乗るが、ここで自称画家、かつ自称厚和特務機関嘱託のMと会同する。また山口県の特高職員に切符や乗船の世話を受ける。このことから、今次の旅行は蒙古自治邦だけでなく日本側官憲にもオーソライズされたものであることが推定される。

釜山からは急行「興和」で丸一日かかって北京に着く。

到着早々、日本軍の交通検問に出会い、北京が完全な軍事占領下にあることを実感する。〝大東亜共栄圏〟との最初の遭遇として記銘すべき出来事であろう。

九月十九日〜二十二日、北京に滞在、北京通の松下衡次郎（かんじろう）[9]という人物に旧跡を案内してもらった外、プロレタリア文学時代の友人坂井徳三[10]、日本びいきの映画演劇製作者黄子明[11]などにあう。また、北京とハルビンでキャバレーを経営している文学とは何のゆかりもない人物、しかも一会して気が合い戦後まで長く付き合いが続く福田千之（せんし）[12]にここではじめて逢っている。その後、山西省雲崗石仏などを見学し、張家口に入る。

九月二十五日〜十月十二日は、張家口を根城として蒙古自治邦[13]（当時張家口が自治邦の暫定首都となっていた）の要路の人物を取材し、張北、厚和（現フフホト・綏遠）、包頭、山西省の龍烟鉄鉱[14]などを訪れている。

この期間の特筆すべきこととしては――

張家口

・張家口の自治邦政庁は便所の臭気の満ちた恐るべき建物であること。

・内蒙軍最高指令李守信[15]との会見。一般的だが率直な談話が記録

されている。

・岩崎駐蒙公使との会見。内蒙の現況についての談話が長文で記録されている。日本支配の公的な状況が読み取れる。

・警備司令部による乞食狩りを見学。指揮する音成中佐の懇切な指揮ぶりと何となく間延びした軍隊の雰囲気。

・自治邦の役人で興蒙委員会嘱託という岡部理[16]と知り合う。

厚和

・蒙古軍最高顧問小倉達次少将取材。興蒙の意見を聞く。

・回民駱駝貿易商曹英に駱駝貿易の実態を取材。

・イスラム学の大家で今は自治邦の高官となっている須田正継[17]と相知る。

包頭

・蒙古自治邦回教委員長蒋輝若[18]に面会。日本支配下の回民政策について聞く。

その他

・張家口の遥か北方、張北の駐屯部隊に慰問講演にいく。部隊長森田大佐は大変変わった印象の軍人……

・龍烟鉄鉱を見学。

四　主な旅程②　貝子廟とアパカ特務機関

十月十二日〜十四日。十二日朝、座席もない爆撃機改造の航空便で貝子廟[19]にむかう。貝子廟は著名なラマ廟のある交通の要衝で、百人近いスタッフを擁するアパカ特務機関[20]がある。本来ここが蒙古草原の貴司の最終取材目的地だった。

ここの牧野特務機関長[21]は明敏な騎兵中佐で、部下には煙たがられているが、貴司はいい関係を構築でき、機密書類も含めいろいろな情報に接することができた。ことに、特務機関員たちとの座談会は、この時点での、内蒙古の実質的な軍事支配、内政支配の具体的な状況についての、支配者側からの見方が率直に語られている。

貝子廟滞在の一日、貴司はここの中学校を見学、時間割や年齢別生徒数、親の職業や資産状況、など詳細な実態を記録している。

そして、上記の座談会で最もよくしゃべった左近允正也[22]という早稲田大学出身の三十二歳の青年に注目する。彼はもともとは特務機関の職員だが、今は自治邦政府の嘱託（蒙古側の役人）という形で、ここ貝子廟から東方百五十キロの草原のかなた、西ウジムチンに単身赴任しているという。そこは放牧の蒙古人しかいない純蒙地帯で、そこに左近允青年は実質的に関東軍特務機関を代表する唯一人の権力者として君臨している。そして、砂糖とか缶詰とか輸入煙草とか、内地ではもはや見ることもできない貴重な品物を沢山コレクションし、加えてふんだんにある肉、乳製品に取り巻かれて暮らしており、貴司がきてくれれば大歓待するという話であった。貴司は直ちにこの招待に応じ、翌日には任地に帰る左近允に同行して、午後一杯かかってトラックで西ウジムチンに行く。

五　主な旅程③　西ウジムチンと左近允正也

『フェンスレス』オンライン版 第2号（2014/06/20発行）
占領開拓期文化研究会 senryokaitakuki.com

十月十四日〜二十一日の間、貴司は西ウジムチンに滞在した。全く飛び入りの旅程にも関わらず、滞在は足かけ八日間に及び、その記載は一五〇頁（約十五万字）に達している。この西ウジムチン滞在が『蒙古日記』のハイライト――いわゆる純蒙地帯で、同時に対ソ最前線、日本支配の最先端、いわば〝大東亜共栄圏〟の最辺縁という位置づけでその実態を凝視したと考えられる。

着いてみると、そこには一応王府、ラマ廟、盟公署、ホリシャ（蒙古人の公協同組合）の店、漢人売買の店、蒙古人の包の群れ、そして日本の商社（大蒙公司）駐在事務所（数名の駐在員）などがあり、一地方のセンターではあるが、貝子廟とくらべてはるかにさびれた草原の小邑にすぎない。

しかし同時にそこは、青年左近允が司法、行政のすべてを統括するシャングリラであった。彼は、蒙古服蒙古刀のいでたちで、王公なみの赤色の包に着座し、次々と持ち込まれる訴えや決裁事項に決定を下す。神聖不可侵の絶対的権威であるはずの活仏とも平気で列座する。蒙古の感覚でいえば活仏と同列に座るなどということは即刻打ち首にあたいする無礼のはずだ。（もっとも、ここの活仏は七歳の可愛い男の子で、貴司も、菓子を手渡してうろたえさせるという大非礼を犯している）

左近允は日本人離れした巨大漢で、タラカン・バクシ（巨大な先生）とあだ名され、当地では泣く子も黙るという存在である。彼には、忠実一辺倒の家令と数人の少年家僕がかしずいている。何故か絶対者左近允は食事の準備になると、突然荒れ狂い、ちょっとした瑕疵……たとえば茶碗にちょっとごみがついていたとか、箸が不揃いだとか、美味しそうな肉料理の味がちょっと気に入らないとかで、家令や家僕をどなりつけ、ものを投げつけ（時にそれが海軍ナイフの場合もある！）追いまわす。ただ、従者たちには毎度のことらしく、泣き声をあげて逃げ惑うわりには、上手によけるのでほとんどあたらない。

そしてひとあたり狂乱の嵐が過ぎると、左近允は突然柔和になり、客たちに、内地では想像もできないほどのご馳走を勧める。

絶対者左近允は当然のことながら、この地の実状についての、究極の消息通でもある。貴司は、蒙古人の生活を支える三つの経済組織――ホリシャ、漢人売買（山西省を本拠に、牛車に荷を積んでこの地帯を行商し、深く蒙古人の暮らしに入りこんでいる。西ウジムチンにはその倉庫や二十人が寝泊まりする事務所兼宿舎がある）、日本の商社（事務所があり数名の日本人がいる）を案内され、詳細な聞き取りをする。

そこで、内蒙支配を担うはずの左近允や実際に満州蒙古で牧場を経営している笹目雄恒が異口同音に語った言葉が書き留められている。左近允は――

「僕はとてもあいつら（＊大蒙公司の日本人商人）が嫌ひですね。……軍を笠にきて強権に物をいはせるから、強権も何も持つて

ゐない漢人よりは押しがきいて、蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありはしません。」

笹目は、満州で蒙古人から牛や馬を買い上げるのは満州畜産会社だが、みな満州畜生会社としか呼ばない、「それくらゐかれらは非道なことを蒙古人に対して行ひつづけてゐる……一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。」と極言する。

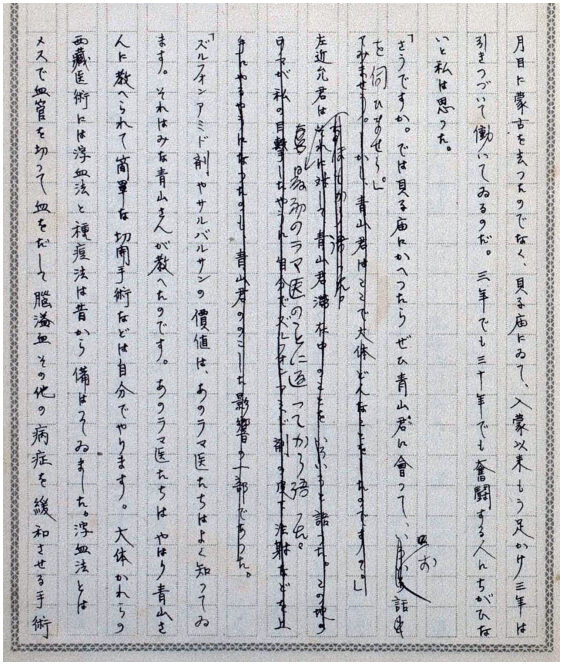


図4：丸背ブック型A5版ノートに速記者（常光妙子）によって浄書された『蒙古日記』原文のページ面。若干ではあるが貴司の自筆による書き加え、抹消などの跡もみえる。右は第3冊目で、左近允正也から現地のラマ医や青山守次医師について聞き取っている。

末端現場での〝大東亜共栄圏〟の現実が、あけすけに語られるのである。このシャングリラには、不思議な人びとが吸い寄せられるようにやってくる。

元血盟団員森憲二は服役後その志を評価されて特務機関員となり、貴司が訪れた時点では機関員への蒙古語研修の先生としてこの地に滞在していた。当時まだ三十歳台の若者だったが「死におくれた」とつぶやいて草原の奥に逼塞している風情を貴司は「オブローモフ」と評している。

笹目雄恒、猪口三蔵は、蒙古自治運動の初期からこの西北の草原を〝遊弋〟し、時にその裏面史に重要な足跡を残した〝蒙古浪人〟の大物である。格別の用事はなさそうなのに「遊びにきた」といって、そのような〝古老〟たちがぶらぶらしている。これも印象的な情景である。

この古老たちからも、貴司はいろいろ話を書き留めている。

例えばその一つ、蒙古自治運動の事実上の出発点となった徳王による百霊廟会議（一九三三年）は、徳王というリーダーのかつぎ出しを含めて、笹目らが画策したものだったという笹目自身の述懐が記録されているが――

戦後、笹目が公開した各種の回顧録では、蒙古自治運動に関

する記述が曖昧なので、貴司が日記に書き留めた記録はきわめて資料価値が高い。

と『貴司山治研究』で森久男氏がコメントしている。[23]

六　主な旅程④　内蒙軍事支配と民政

十月二十一日、貴司はトラックに便乗してで西ウジムチンから貝子廟に戻り、数日を過ごす。シリンゴール盟の中心地である貝子廟では、手芸学校が開校し、大きな保健所が建設中で、いわゆる〝殖産興業、保健衛生〟などの民政的努力が垣間見え「ここから新しい蒙古が生まれつつある」という感想を貴司は記しているが、他方で、たとえば貝子廟（崇善寺）での講演会で、ラマ僧の出席は少なく、いろいろなことで日本の行政にたいする隠然たる非協力が感じられる。牧野隊長はこの状態を気にしていて「寺院に放火してあわてさせるか」と軍事権力者らしい冗談を口走る。

中学校を見学すると、校庭には自治邦の旗がひるがえり、壁には日本語の「宣誓」が掲げられている。曰く「我等ノ体ハ蒙古ノモノ、我等ノ心ハ蒙古ノモノ、我等ノ体ト心ヲ鍛ヘ、誓ツテ興蒙ノ礎トナラン」。

また、ここでずっと蒙古人医療に献身している青山守次医師[24]からも長時間の聞き取りを行い、蒙古草原での医療の実態を、極秘というものもふくめたいろいろな統計データとともに記録した。また、青山医師の多くの体験談、エピソードを書き留め、後にこの医師を題材に「沙漠に咲く花」という小説を書いている。[25]

十月二十六日、貝子廟をたって飛行機便で張家口に戻り、岡部宅に転がり込み虱退治などをしてもらう。十月三十日まで滞在し、ここで「蒙古旅行」は終わる。

このあと、山西省太原にたちより、閻錫山の豪邸に住むカリスマ的省顧問甲斐政治[26]に面会。ナチス親衛隊風の独自の「急進建設団」による山西省改革の理想を聞くなどして、北京の福田千之宅に帰り着く。福田家の隣に住む新民学院の数納兵治教授[27]と知りあい、酒飲みで付き合いの広い数納に引き回されて生粋の北京の知識人たちを知り、素晴らしい骨董品や料理に出会うが、同時にこれらのものやわらかな〝老北京人〟たちが、日本にほんの少しの共感も持っていない面従腹背の極地であることを悟る。

さらに、**十一月十四日～二十日**、福田千之とともに、満州、ハルビンへ旅し、ハルビンでは、ビヤホール、キャバレー、女給、キャビア、ふぐ料理、美人の女按摩……など、もはや内地ではみることもできない歓楽の極みが未だに咲き狂っているのに出会う。敗戦一年半前の満州である。

十一月二十日、新京で福田千之と別れ、満州新聞に勤務する山田清三郎にあう。ここで、まるで落語のオチのような一つの結末に出会う。この旅行の前半の先達役だった自称画家・特務機関員のMは、十年以上前、治安維持法違反で下獄していた山田清三郎が千葉

刑務所で知りあった男で、彼の罪科は思想犯ではなく「横山大観の贋作師」であり、前科二犯、懲役四年で服役中だったというのである。生粋の詐欺師、詐話師と二ヶ月ばかり旅したことが判明し〝数奇〟な結末となった。

十一月二十四日、釜山で乗った関釜連絡船は、往路とはすっかり様子が変わっていた。乗客全員が常時救命具を装着し、船はジグザグの避雷行動を取りながら進むという厳戒態勢となっていた。実は、貴司が大陸を旅している間に、事件が起こっていた。妻孝子の記した「留守日記」に――

十月八日　崑崙丸（関釜連絡）が潜水艦の雷撃にあひ沈んだ――が報ぜられてあつた。六一六名中七二名生存したとある。

と書かれている。……ともかく、船は夕方下関に着き、旅行は終わった。

七　総括

貴司が蒙古草原で見たものは何だったのか。それは――「大東亜共栄圏」は幻影だったという具体的な現実だ。いや、蒙古草原まで行かずとも、大陸に着いた最初の夜の北京駅頭で、貴司は防疫取締りをする日本軍の警備に遭遇することによって「共栄圏」は軍事占領以外の何物でもないことを体験している。

草原の末端の〝現場〟にいって、事態はより鮮明になる。軍事権力の末端で事に当たる日本人自身が――「軍を笠にきて強権に物をいはせ……蒙古人からは法外に安い値段で牛でも馬でもふんだくるんです。それでは蒙古の復興も何もありはしません。」「満州では蒙古人から牛や馬を買ひあげるのは満州畜産会社なのですが、われわれ蒙古関係者は……満州畜生会社と呼びます。……みやうによれば、一番この蒙古草原を荒してゐるのは、その畜生どもでせう。」というのである。

たしかに、貝子廟のような枢要の地では、殖産、教育、医療などいわゆる〝近代化〟のために努力する日本人や蒙古人たちの、ある意味では涙ぐましい存在も見える。しかし、その背後には、特務機関長を焦慮させるような、ラマ教寺院の隠然たる非協力の影が立ち現われている。貝子廟の一時の平和は、軍事権力によって辛くも保たれているものに過ぎないことが、総体として感じられる。

そしてそのような構造が、昭和十八年秋という時点で、破綻寸前のゆきづまった、展望のない状態におちいっていることが、左近允青年や、アパカ特務機関のスタッフなど、現場の渦中にいる人びとの言葉の中に、時にストレートに、時に屈折したかたちで、溢れ出ているのを認めないわけにはいかない。

森久男氏は前掲書で「貴司は左翼転向作家として、東亜協同体の実現に新たな文芸活動の意義を求めた。しかし、戦局悪化にともなって、その幻影も崩れさった……」「すべてに失望して帰国するや、新しい文学を創造する意欲はすでに失われていた。[28]」と総括する。

図5：ラマ廟で、蒙古旅行中のスナップ
（撮影場所不明）

実際、冒頭に記したような文学的、生活的煩悶からぬけだす方途を探すための旅、という目的は失敗に終わった。しかし、それは予め分かっていたはずだ。東亜協同体的幻想によっておのれの「近代の超克」をはかるというがごとき目標は、正に前掲森氏のいうごとく「戦局の悪化にともなって……崩れさっ」ているのである。その共同体幻想の崩れ残りの破片でもが、北涯の草原の彼方に転がっているかも知れない……貴司がウジムチンの草原に輾転するプランパゴに気を引かれるのはその潜在意識のせいかもしれない。しかし、プランパゴはプランパゴ、枯れ草の塊に過ぎない。

帰ってきた日本列島には、一作家の思念を越える困難が押し寄せてきていた。昭和十九年に入ると状況はさらに逼迫してくる。

……私は自分の小さな私生活のなやみが、民族の大きな運命につながるいとぐちをみつけることのできないなやみのためにも、……蒙古の奥地まででかけて行つたのだ。……（＊そして）私は、わが身のさいなまれる生々しい思ひが、典型的な一日本人として今日の日本民族全体の運命をこらへてゐる思ひに重なつてゐるのを知つた。（「日記」昭和十九年一月二日）

……流石に、けふは作家たちの小説を一冊、本にする紙もなくなつた日本の現実に暗澹となつてしまふ。物を書くことから離れて、この恐るべき戦争の時代をいかにたたかつて行くべきか？　考へこみながらおそくかへる。すつかり頭痛をおこし、かへるなり頭をかゝへてねてしまふ。（同四月十日）

……情報局へ行く……自分たち吉祥寺在住作家二三人が附近の工場に作家として働きにはいり、女子挺身隊や通年動員をうけた学生などの精神支持にあたる仕事をしたい（＊――と申し入れをするが、何も具体的な結果は得られず文学報国会にもいく）中村武羅夫、芳賀檀、米持格夫の三氏に同じ話一時間。このやうな人に何を話した所でどうなるものでもない。すつかり徒労の感じ。」（同四月十四日）

かくて、貴司は、昭和二十年春、爆弾の雨と降る武蔵野（武蔵野市は中島飛行機工場の存在によって米軍爆撃の重要標的となった）を逃れて〝物理的に〟生き延びるために丹波山中に疎開を兼ねた開拓民となって移住した。蒙古旅行から一年余り後のことである。そして

そこで、意外な人間の紐帯を再発見することになる。

（以上）

注

（1）『貴司山治日記』昭和十九年六月六日の項に「蒙古日記了る。ノオト五冊、原稿用紙にして二五〇〇枚」という記載がある。四百字詰め原稿用紙二五〇〇枚は百万字になる。但し、原稿は速記者（常光妙子）によってマス目のないノート用紙に浄書されているので正確な字数は算定しにくいが、実際には概算八〇万字くらいと算定される。

（2）『貴司山治全日記』：『貴司山治全日記ＤＶＤ版』および別冊『貴司山治研究』（貴司山治研究会（代表立命館大学中川成美教授）編、不二出版、二〇一一年）。

（3）活仏：翻刻補注（20）参照。

（4）王：翻刻補注（21）参照。

（5）笹目雄恒：翻刻補注（19）参照。

（6）Ｍ：翻刻補注（1）参照。

（7）徳王：一九〇二～一九六六年。一九三三年の百霊廟会議に始まり一貫して内蒙古自治運動を主導したカリスマ的人物。ただ日本軍占領下にはそれと妥協して自治政府を立ち上げる、といった経緯もあり、戦後は政治犯として投獄されるが、一九六三年釈放され詳細な自叙伝を書きのこした。ドムチョクドンロプ著・森久男訳『徳王自伝――モンゴル再興の夢と挫折』（岩波書店、一九九四年）

（8）平出海軍大佐のオフレコ談：戦後昭和三十年刊行の『ゴー・ストップ』巻末の「わが遍歴（未定稿）」という貴司自身が書いた略年譜風の一文に――「一九四二年。九月ごろ読売新聞第一線の会（同紙寄稿家の会）で海軍大佐平出英夫からミッドウェー沖の敗戦をうちあけられ、「日本敗北必至」をひそかに告げられて、自分の東亜共同体的認識や日本本資本主義への認識が全く錯覚にすぎないことを知り、すべての自信を失って軽井沢の山荘にこもり、懊悩煩悶にくらす。自滅のつもりで平出を訪ね報道班員としてカー・ニコバル島へ赴こうとする。情報局が許可せず。／一九四三年。一月に日野原孝子と結婚。これに長男を托しておき、単身蒙古に脱出、死ぬつもりでソ連国境近くを徘徊……」（『日本プロレタリア長編小説集３　ゴー・ストップ』（三一書房、一九五五年）二三四頁）と書かれている。もっともこの記述は戦後十年を過ぎた時期のものであり、それなりの美化修飾を感じる。例えば「山荘にこもり、懊悩煩悶……」というのは、内面は知らず、外形的には、やや作り事に過ぎる。小生自身の記憶（当時十歳）では、独身となった父が四～五人の若い女性速記者を従えて千が滝の別荘に暮らし、口述原稿の量産に励んでいたのは、子供心にも大変華やかな記憶であり「山荘にこもり……」という枯淡な印象とは相当に異なる。また、最も華やかに戦果を喧伝していた時期に、その露出の花形である平出大佐が本当にこのようなネガティヴなブリーフィングを行ったのか、この貴司の戦後十年時点での記述の傍証は未だ確認できない。

（9）松下衙次郎：翻刻補注（2）参照。
（10）坂井徳三：翻刻補注（5）参照。
（11）黄子明：翻刻補注（4）参照。
（12）福田千之：翻刻補注（3）参照。
（13）蒙古自治邦：翻刻補注（7）参照。
（14）龍烟鉄鉱：翻刻補注（8）参照。
（15）李守信：翻刻補注（9）参照。
（16）岡部理：翻刻補注（10）参照。
（17）須田正継：翻刻補注（11）参照。
（18）蒋輝若：翻刻補注（12）参照。
（19）貝子廟：翻刻補注（14）参照。
（20）アパカ特務機関：翻刻補注（13）参照。
（21）牧野正民特務機関長：翻刻補注（15）参照。
（22）左近允正也：翻刻補注（17）参照。
（23）森久男「貴司山治の『蒙古日記』」、前掲『貴司山治研究』五三頁。
（24）青山守次：翻刻補注（23）参照。
（25）貴司山治「沙漠に咲く花」（『講談倶楽部』一九五〇年十二月号）。
（26）甲斐政治：翻刻補注（24）参照。
（27）新民学院の数納兵治教授：翻刻補注（27）参照。
（28）森久男「貴司山治の『蒙古日記』」、前掲『貴司山治研究』五七頁。